



JICA
開発教育
プラザ
2023

学校から地球の未来へ 5つのアイデア

アイデア⑤ 教室を超えて広がる学び ～JICA地球ひろば訪問のすすめ～

2023年度 2月号

JICA地球ひろばでは、世界が直面する多くの課題などを学べる体験型展示と、途上国での活動体験談、参加型学習を組み合わせたプログラムを実施しています。今回はJICA地球ひろば訪問を開発教育の取り組みに活用された2名の先生にお話を伺いました。

校外学習でJICA地球ひろば(市ヶ谷)を訪問した 埼玉県立伊奈学園中学校の事例



対象:2年生 / 科目:総合的な学習の時間
人数:2クラスのうち希望生徒約30名
訪問時期:2023年2月
展示内容:企画展「[世界をめぐるサステイナブルなやさしい観光展](#)」
担当教諭:松倉 紗野香 先生

Q. 校外学習の訪問先にJICA地球ひろばを選んだ背景と理由を教えてください。

昨年度、2年生は1年間を通して、「サステナビリティ」をテーマの中心に置いた探究活動をおこないました。1学期から2学期にかけて、生徒たちは共通の図書を読んだりフォトレポートを作成したりして、サステナビリティについて独自の切り口を見つけていき、テーマごとに4～5人のグループを形成して探究活動を進めました。その中で出てきた問いを、3学期の校外学習で学外の専門家に聞きに行くという流れでした。JICA地球ひろばでは、**協力隊経験者の体験談を聞けたり、体験を通して学べる環境で、生徒たちが単に話を聞くだけでなく、見たり触れたりして身をもって学ぶことができる**ため、訪問先の候補として挙げました。フェアトレードやフードロス問題、スローファッションなど、国際協力やSDGsに関する探究テーマを持つグループがJICA地球ひろばを訪問し、エネルギー問題や科学にまつわる事象をテーマとするグループは国立科学博物館を訪問しました。

Q. 訪問時の生徒たちの様子について教えてください。

コロナ禍の影響ですべて制限のある学校生活を送っていた生徒たちは、学校の外に出て活動することが中学入学後初めてだったので、それだけでイキイキとした様子でした。私たちが訪問したときはちょうど企画展「[世界をめぐるサステイナブルなやさしい観光展](#)」の展示期間中で「持続可能な観光」がテーマでした。生徒たちの中でも特に、サステナブルツーリズムをテーマに探究していたグループは、観光とSDGsの各ゴールとの関係や、観光産業における開発のメリット・デメリットなどについての展示を見て、必死にメモを取っていました。また、現地で使用されている通貨も展示されており、興味深そうに触れていました。

さらに、SDGsの展示の中の水汲みバケツの体験では、実際に途上国の子どもたちが運ぶ水がどれだけ重いかを実際に体験しました。これだけの重さの水を持って毎日何kmも歩くことの大変さや、その状況に置かれている子どもたちがいるという切実な現実を感じ取ることができました。



↑水汲みバケツを体験している様子

地球案内人からの説明を聞くとときも、最初は緊張した様子でしたがすぐに打ち解け、**教室にいる時よりも多く質問が飛び交っていました**。現地の写真や現地の様子を紹介してもらい、**インターネットでのリサーチからは得られない感動や驚きがあったようでした**。



↑地球案内人のガイドのもと展示を見学

JICA地球ひろばでは、基本展(人間の安全保障)と企画展(独自のテーマ)を交互に展示しています。

Q. JICA地球ひろばへの訪問後の取り組みや生徒たちの変化について教えてください。

3月に1年の活動をレポートにまとめて、授業参観や学年集会でグループごとに発表する機会を設けました。インターネットや本で調べた情報だけでなく、**自分で見て体験したことを中心にレポートを作成している様子が印象的でした。**3年生になって「国際」という授業を選択した一部の生徒は、2年生の時に1年間かけて取り組んだテーマに対して、「もっと突き詰めたい！」と、積極的に活動に取り組むようになりました。また、私が理事を務める開発教育協会のイベントに自主的に参加したり、夏休みに個人的にJICA地球ひろばを訪れる生徒がいたり、生徒たちの意識が1年間の活動を通して大きく変わったことを実感しました。



↑ 振り返りの授業風景



↑ 募金の集計をしている様子

元旦に能登半島地震が起き、冬休み明けに顔を合わせた生徒たちは、「自分たちにできることは何だろう」と考え、校内での募金活動を始めました。自分たちの周りで起きている問題に対して、「**自分にも何かできるかもしれない。できることがあるならやってみよう！**」という姿勢が見られるようになったのは大きな変化だと思います。

Q. JICA地球ひろば訪問のおすすめポイントは？

「百聞は一見にしかず」と言うように、学びは実際に見て触れることで深まります。中学生や高校生が途上国に直接行くのは難しいかもしれませんが、JICA地球ひろばのような場所で、実際に五感を使って自分の身体で体験することで、教科書だけでは得られない学びが深まるのではないのでしょうか。世界の問題についてより身近に感じ、自分の生活や暮らしと関連させて考えるきっかけになると思います。

今年1月、オンラインでの活動体験談/参加型ワークショップと、対面での展示紹介のハイブリッド構成で「オンライン地球ひろば訪問」が初めて実施されました。

オンライン地球ひろば訪問を体験した 川口市立高等学校(定時制)の事例

対象:2年生 / 科目: 地理総合 / 人数: 2クラス 約40名
展示内容: 基本展「[人間の安全保障](#)」

担当教員 田所孝博先生のコメント

実際にJICA海外協力隊として活動した経験がある方のお話は、生徒たちだけでなく教員の心にも強く響きました。教室に地球ひろばにあるものと同じ展示物を持ち込み、生徒は展示物に触れることもできたため、世界の問題について考える第一歩としてとてもいい学びの時間となりました。校外学習は教員にとって準備が大変なこともあります。今回のようにオンラインで学ぶことができることはメリットが大きいと感じます。また**オンラインでもインタラクティブに進めていただいたこともあり、生徒たちが真剣に考える様子が見られました。**

本校は定時制高校で、年配の生徒が数名います。また外国籍の方が多く住む川口市の学校であり、外国につながる生徒が全体の約3~4割ほどいます。印象的だったのは、グループディスカッションの際に多様な視点からの意見が飛び交っていたことです。親としての意見、外国籍の子どもとしての意見など、「**一つの物事に対していろいろな意見や見方、考えがある**」と理解を深めていく様子は、**普段の授業ではなかなか見られない光景でした。**

生徒からは「少し難しい問題だったけど、私たちに関係ない問題ではないし、目を塞ぐことでもない」「自分たちに何ができるかを考えて行動していきたい」といった声を聞くことができました。教員の間でも今回の取り組みは話題になりました。今後も外部機関との連携を積極的に行い、生徒が多様な経験を持つ人から話を聞く機会を設けようという話が出ています。これからも学校現場に留まらない教育を目指していきたいです。

JICA地球ひろばの体験を通して、生徒たちが世界の問題をより身近な問題として捉えていく様子を感じ取れました。この体験から始まり、「自分には何ができるんだろう」と考え、行動していく姿は、開発教育を通じて目指す一つの目標ではないのでしょうか。皆さんもぜひJICA地球ひろばに足を運んでみてください！



↑ グループディスカッションの様子



↑ 「貧困連鎖の鎖」の展示